

開館35周年記念移動展 「ひめゆりと久米島」開催

2024年5月31日から6月30日まで、久米島博物館にて開館35周年記念特別展「ひめゆりと久米島」(主催：ひめゆり平和研究所、共催：久米島博物館)を開催しました。県内移動展としては3か所目、離島では初開催でした。オープニングセレモニーでは久米島町教育長宇江城詮氏のご挨拶のあと、当館館長の普天間朝佳がギャラリートークを行いました。また、関連イベントとして、学芸員による「“ひめゆり”を伝えるワークショップ」と、久米島高校での平和講話を実施しました。

会期中27日間の来場者数は約500人でした。久米島町内の小中学校が平和学習で活用し、久米島出身のひめゆり学徒の家族や知人、関係者が訪れ、沖縄戦で亡くなった生徒たちを偲ぶ姿が見られました。アンケートには、ひめゆりの生徒に久米島出身者がいることを初めて知り身近に感じた、戦争の悲惨さを改めて感じたという感想や、今後も各離島での開催を望む声が寄せられ、地域で発信することの重要性を再認識する機会となりました。

本展示会の開催にあたり、久米島博物館および久米島町教育委員会のスタッフの皆さま、ひめゆり学徒のご家族、関係者の皆さまに多大なご協力を頂きました。厚く御礼申し上げます。

来年は、戦後80年企画として、石垣市での移動展開催を予定しています。



久米島小学校の児童たちの見学の様子。町内の多くの児童生徒が来場した



館長によるギャラリートーク



亡き姉の手紙を見るご遺族

CONTENTS 目次

- | | | | |
|---------------------------|----|----------------|----|
| ◆ 開館35周年記念移動展「ひめゆりと久米島」開催 | 01 | ◆ 仲宗根政善日記抄(69) | 06 |
| ◆ トピックス | 02 | ◆ 本棚(仲程昌徳) | 07 |
| ◆ 資料館の動き | 03 | ◆ お知らせ | 08 |
| ◆ 2024年度博物館実習生レポート | 04 | | |

■「ひめゆりの塔慰霊祭」開催

2024 年 6 月 23 日、「ひめゆりの塔慰霊祭」を举行了ました。参列者はご遺族や関係者など約 190 人でした。ひめゆり学徒隊生存者・同窓生も約 10 人参列しました。

今年の慰霊祭は日曜日にあたったため、ご家族での参列が多く見られました。毎年参列していた親御さんに代わって初めて訪れた方や、今後は息子に参列してほしいと思って一緒に来ましたという方など、平和への願いを次の世代に引き継ごうとする姿が印象的な 1 日となりました。



開式の言葉を述べる仲程昌徳理事長

■屋根や外壁の補修工事を実施

2024 年 6 月下旬から 8 月にかけて、漏水補修工事を实施了ました。

開館からの 35 年間で建物の老朽化が進み、施設内の一部においてひび割れや雨漏り等が確認されていました。検査の結果、屋根と壁面の補修・防水工事を実施することとなりました。休館はせず、展示室内や音が出る工事等は夜間工事で対応しました。この機会に、排煙窓・排煙オペレーターのチェックと修繕も行っています。



屋根の補修の様子

■夏休み企画としてガイダンスを实施

2024 年 7 月と 8 月の週末やお盆休み期間を中心に、夏休み企画として、多目的ホールにて職員によるガイダンスを实施了ました。イラストや映像を使用し、約 20 分でひめゆり学徒隊の戦争体験について解説する內容です。

今回初めてホームページでの告知を行いました。計 17 回で約 430 人が参加しました。どの回にも家族連れが多く、「子どもに見せたくて来ました」という声がよせられました。真剣に話を聞く子どもたちの姿から、ひめゆりについて関心を持つきっかけになっていることを実感しました。今後も継続して実施していきたいと考えています。

■「RBC 平和朗読会〜ウガンダとオキナワ〜」を開催

2024 年 8 月 23 日、琉球放送(RBC)主催「RBC 平和朗読会」が当館のホールで開催されました。小さな子ども連れの方や友人同士など、約 30 人が参加しました。第 1 部は、ウガンダの子ども兵士の絵本『少女兵士ピチャ』について、仲田紀久子アナウンサーが朗読し、作者の加古紗都子さんが解説を行いました。第 2 部は、元ひめゆり学徒の北城良子さんの戦争体験記「六月が来るたびに」を、アナウンサーの仲村美涼さんが朗読しました。戦後、小学校の先生をしていた北城さんが 2 年生の教え子のために書いた貴重な記録を朗読によって紹介していただくことができました。最後は、ウガンダの布を使って、うちわづくりを楽しみました。



熱心に朗読に耳を傾ける参加者



「六月が来るたびに」を朗読する
仲村美涼アナウンサー

■ 他館のイベントに館長が登壇

2024年6月1日の「対馬丸記念館開館20周年記念シンポジウム～『対馬丸』から学ぶ子どもと平和～平和な未来をともに創るために～」(於：那覇市)と、7月2日に佐喜眞美術館で開催された座談会「戦争と平和、命どう宝ー絵画からのメッセージ。どう受け止め伝えるか」に、当館館長の普天間朝佳が登壇しました。両イベントには、各館の館長や学芸員、関係者らが登壇し、積極的な提言と活発な議論がなされました。

対馬丸のシンポジウムでは、伝えていく意義やどう平和を発信していくか、教育現場の取り組みなどが話し合われました。普天間は、共通の課題として、スタッフの継続性の重要性に触れ、そのための収入確保や今後の人材育成などについて発言しました。

佐喜眞美術館での座談会では、画家の気持ち、絵を通して戦争をどう伝えるか、絵で戦争を伝えてきた実践、文化や芸術が戦争に利用されてきた歴史などが話し合われました。普天間は、当館でひめゆり学徒隊の体験を絵にした経験から、絵を活用することで戦争体験の継承も深化していくのではないかと提起しました。

県内の類似館との連携は、共通の課題を確認し、戦争や平和をどう伝えていくかを議論できる大切な機会となっています。



対馬丸記念館開館20周年記念シンポジウム

■ 資料館の動き (2024年5月～2024年11月)

2024年

- 5月31日 久米島博物館にて開館35周年記念移動展「ひめゆりと久米島」開幕。オープニングセレモニー開催
久米島高校で平和講話を実施(講師：学芸員前泊克美)
- 6月1日 久米島博物館でワークショップを実施(講師：前泊克美)
- 6月23日 ひめゆりの塔慰霊祭挙行政
- 6月24日～9月12日 屋根・外壁補修工事実施
- 6月30日 開館35周年記念移動展「ひめゆりと久米島」閉幕
- 7月17日 三重大学へ講師派遣(講師：説明員尾鍋拓美)。「沖縄戦とひめゆり学徒隊」をテーマにした講義を行う
- 7月24日 糸満市平和の語り部育成事業受入
- 7月26日 夏休み企画としてガイダンス実施(8月31日までに計17回)
- 7月30日 糸満市教育委員会初任者・中堅者研修を受入
- 7月31日 沖縄県主催ウチナージュニアスタディツアー平和学習受入
- 8月23日 琉球放送主催「RBCアナウンサー平和朗読会～ウガンダとオキナワ～」開催(於：多目的ホール)
- 9月3日～9日 博物館実習受入(八洲学園大学 酒井彩花さん)
- 10月20日 沖縄県主催「第12回沖縄平和賞国際平和ワークショップ」「第12回沖縄平和賞国際平和シンポジウム」
(於：那覇市、ワークショップ講師：説明員尾鍋拓美。シンポジウム登壇：館長普天間朝佳)
- 11月7日 第31回日本平和博物館会議定例会に館長の普天間朝佳がオンラインで参加
- 11月16日 沖縄県平和祈念資料館主催「令和6年度 沖縄戦の語り継ぎ手養成事業」(於：糸満市)第9回講座の講師を館長の普天間朝佳が務める
- 11月19日 RBCラジオ「まるごと1日平和～戦後80年に向けて考えようスペシャル」に館長の普天間朝佳が出演
- 11月22日 「沖縄県地域史協議会2024年度第2回研修会」(於：八重瀬町)で学芸課長の古賀徳子が報告を行う。説明員の尾鍋拓美も参加
- 11月25日 アジア太平洋連携推進事業の有識者会議に館長の普天間朝佳が出席
- 11月30日～12月1日 「平和のための博物館・市民ネットワーク2024年度全国交流会」(於：東京都江東区)にて学芸課長の古賀徳子が報告を行う

2024年度博物館実習生レポート

2024年9月3日から9月9日まで博物館実習を行い、八洲学園大学の酒井彩花さんを受け入れました。職員とも積極的にコミュニケーションをとり、資料館の活動にも高い関心を持って実習に取り組んでくれました。

今回のレポートでは、入館者減や沖縄戦をどう伝えていくかという当館の課題に対して、データを活用したアプローチを提言してくれました。

実習生
レポート

ひめゆり平和祈念資料館への提言：データを活用した戦略的アプローチ

八洲学園大学 生涯学習学部 酒井彩花

1 はじめに

来年で戦後80年を迎え、戦争を直接体験した世代が減少する中、日本における戦争の記憶が徐々に風化している現実がある。情報として「戦争」を知っていても、それを現実として具体的に想像できる人は少ないのではないだろうか。特に、過去の戦争の一部である「沖縄戦」を心に描くことができる人はさらに少ないかもしれない。こうした記憶の風化は、時が経つにつれてますます深刻な問題となっている。これに伴い、ひめゆり平和祈念資料館に限らず、多

くの平和博物館が来館者の減少や継承者不足という課題に直面している。

これらの課題に対応するためには、従来の「戦争をどう伝えるか」「どうやって資料館に人を呼ぶか」という視点に加え、まず沖縄戦や資料館そのものを「知ってもらう」ことに焦点を当てる必要がある。そしてそのためには、データ収集という普遍的な手法を取り入れ、戦略的なアプローチを行うことが重要だと考える。

2 データ収集の重要性

人や資金が動く際に、データの収集を徹底することは極めて重要であり、適切なマーケティングを行うためには、データに基づく意思決定が欠かせない。もし「～だと思う」「～のような気がする」といった主観的な判断で施策を決め、その効果を測らなければ、一度の結果しか得られず、それ以上の発展や改善が期待できない。さらに、その結果の解釈も人それぞれ異なり、全体としての共通認識が得られにくくなる。しかし、データをもとに施策を継続的に改善することで、その情報は蓄積され、財産となり、次の行動の指針

とすることができる。

マーケティングの視点に加えて、データは職員の業務多様化や多忙化の問題、さらには予算確保にも役立つ可能性がある。データを共有することで、職員間の認識を統一し、問題を可視化し、意思決定を簡素化することが可能となる。また、データに基づく分析は、優先順位を明確にし、どこに無駄があるのかを見極めやすくするため、業務の効率化にもつながる。

3 アナログでのデータ収集の工夫

データ収集というと高いハードルに感じるかもしれないが、アナログでも十分に可能である。例えば、受付で職員が来館者の年齢層を推測し、その年代を記録するだけでも基本的なデータを集めることができる。さらに、展示の終わりに、来館の目的別（「SNSで知った」「テレビで知った」「再訪」「通りがかった」など）の項目に分けた表を準備し、シールを貼ってもらう方法がある。このシールを年代ごとに色分

け（20代は青、30代は赤など）すると、来館者の年齢層とその理由を可視化できる。どの年代が多く、どの年代がどんな理由で来館しているのかを把握すれば、より効果的なマーケティング手法を考えることができる。例えば、20代・30代の来館者が少なく、SNSをきっかけに来館することが多い場合、SNS中心に宣伝活動を強化するなどの戦略が有効となる。

4 プログラムやイベントからのデータ収集

平和学習プログラムや企画展、イベントにおいても、できる限りデータを収集することが重要である。時代や世代によって反応は変化するが、データを通じてその傾向を把握し、

適宜アプローチを調整することが必要となる。このようなデータに基づく改善策を、資料館全体の共通認識として浸透させることで、効果的な運営が可能である。

5 外部データとの連携とマーケティング戦略の再考

データは内部だけでなく、外部にも多く存在する。例えば、沖縄県のデータでは、沖縄をリピートする観光客が増加している一方で、戦跡地参拝を目的とする観光客や戦跡地巡りを目的とする観光客は減少傾向にある。何度も沖縄を訪れる観光客の多くが、沖縄戦について十分に知らない可能性があり、一度来館した人でも、資料館がリニューアルされたことを知らないことが考えられる。リニューアルの情報を積極的に発信し、再訪を促すキャンペーンを展開することが効果的である。

さらに、沖縄にある他の平和博物館や資料館と連携し、共同でロードマップやセットチケットを作成するのも一案である。リピートの観光客が多いということは、今回の滞在で訪れることができなくても、次回訪れる動機付けを提供することができるということである。また、観光客がよく訪れるレジャー施設と連携し、その動線を考慮したマーケティング戦略を立てることも平和博物館としての新たな挑戦となるだろう。

6 地域コミュニティと学校との連携

県内来館者の減少も重要な課題である。沖縄県平和祈念資料館のデータでも、県内来館者数が減少していることが指摘されている。これに対して、学校と連携して発表会を資料館で開催し、親子での来館を促進することが効果的だと

考える。地域の人々が、資料館を通じて平和について考えるきっかけを提供することが、地元来館者の増加につながる可能性もある。

7 終わりに

戦争の見え方が時間と共に変わってきていることを強く感じる。現代では、当たり前のようにニュースや SNS では戦争の情報が流れ、戦争が「近く」にある。戦争を経験していないのに、戦争を知った気になっているかもしれない。

ひめゆり平和祈念資料館がその役割をさらに強化し、来

館者を増やすためには、データを活用した戦略的なマーケティングと運営が不可欠である。アナログでもできるデータ収集の工夫、デジタルマーケティングの強化、地域や学校との連携を例に、方法を変えていきながら、変わらない戦争の実情を未来へと繋いでいくことが重要だと考える。



実習生の酒井さん（左から2番目）を囲んで

仲宗根政善日記抄(69)

〔1980年〕六月二十三日 慰霊の日

〔前号よりつづき〕二十年五月二十八日頃だったか。波平の壕に西平英夫氏からの伝令だといって一人の生徒がかけつけて来た。すぐ来るようにとのことであった。しらじらと明けそめていたが、朝もやが立ちこめていた。伝令の生徒といっしょに本部壕についた。入口をおりて行くと新垣仁正教諭が一高女生数名と岩かげに伏していた。壕の底へとおりて行くと、兵隊や傷病兵、看護生徒がぎっしりつまっていた。西平氏は■色く、ひげもぼうぼうのびていた。伝令が来たとき、既に私は、南風原陸軍病院の壕に重傷患者とともに残して来た、渡嘉敷良子のことだと直感していた。あまりにも重くなくて、二人ともしばらくは口に出さなかった。移動後のお互いの状況を報告し合った。やっと西平氏は口をきった。渡嘉敷をどうしようかという。私はどうしてよいか迷っていた。二人は考えこんでばかりいた。すぐそばに、山城芳子、石川清子、神田幸子が毛布をかけてやすんでいた。三名は南風原陸軍病院移動直前に負傷して、学友に担架でかつがれてやっとここまでたどりついたのであった*1。われわれの話を力のない眼をここにむけながら聞いていた。

西平氏と二人は、先ず、軍に協力を求めて見ようと話し合った。幸い、すぐそばに病院長がおられたので、渡嘉敷良子の救出についてお願いした。病院長はじっと考えこんでおられるばかりで、はっきりと返事はしてくれなかった。一人の女学生を救出するために、すでに敵の侵入している南風原陸軍病院まで兵隊を派遣することの徒労を知っているのである。二人は返事のえられないままひきさがった。救出に出るとすれば、ほったらかして来たのは僕である。当然私が行かねばならない。私が行くというと、西平氏は行ってくれるねと、感謝するように言っていた。しかし、行く決心はしたものの具体的にどうするという考えはうかばなかった。摩文仁までやっとたどりついて来た生徒のほとんどは、疲れ、病人のようになっている。彼らはすすんで救出に参加するであろうか。また救出が成功するであろうか。私は思案にくれた。その中、南風原陸軍病院から最後にひきあげて来た宮城普吉軍医に、伊原部落前の道路でばったり逢った。渡嘉敷を救出に行きたいのですがという、もう病院壕には敵兵がはいっている。救出など出来るものではない、あきらめよと言われた。とうとう救出を断念した。

慰霊祭*2の祭壇の下は本部壕である。そこから黒い蝶が飛んで来ては供花にとまる蝶をみつめながら私は、渡嘉敷が壕でもがき苦しんでいることを思った。

全員の焼香がすんだ。テントをかたずけるのも長田紀春氏や看護婦さん方であった。大隈氏も手伝っている。このささやかな慰霊祭にどんな思いをされたのであろうか。

慰霊祭終了後、ご遺族を第一外科跡へ案内した。例年は清掃してあるのだが、今度は手もつけてない。茅がはびこり、くわず芋が生い茂っていて、通路をふさいでいる。真夏の日はいかにかん照っているのに、洞窟はひんやりしてくらい。零が鍾

乳石の先端から、ときどき、ぽと、ぽととたれる。柵の木はもう巨木になって、枝をはって壕をおおうてい(る。)がらんとした洞窟は大きく口をあいていて、暗い。ささやかな香爐がある。未亡人が最初におりて行って花を供え手を合せた。涙がぼろぼろ流れむせばれた。娘三名が母親のそばに坐った。咽び声が次第に大きくなった。末娘の奈美さんが、とうとう私たちを残してお父さんはなくなったのよと声を出して泣いた。親子四名が泣きさけぶ。息子もたえかねて、はなれて立った。案内して来た奥松も安里も仲里も島袋ももらい泣きしている。私もたえかねた。気丈夫の奥松は、これまで貴方をこんなに立派に育てて下さったお母さんを大切にして下さい。皆さんがこんなに立派に育ちなされたのもお父様が見守って下さったからでしょう。これからはお母さんを大事になさいと気をひきたてる。

かつて福島軍医の恵美子夫人をご案内したことがあった。この岩かげにおられましたとお伝えすると岩を抱きかかえて慟哭された。そうして土をあさり遺骨を拾われた。

遺族の悲しみはつきない。戦争がすんで、三十五年、夫をたずね父をたずねて、洞窟にひれふして慟哭する。父は夫は、再びは帰らない。永遠に消えてしまったのである。心にいえがたい傷をのこしたまま。戦争はいかなる理由によっても肯定されない。

第一外科壕で、ご遺族とわかれた。喜屋武真栄氏が、一万票をひきはなしている放送を車内で聞いて、ほっとした。沖縄県にはまだ良識があると感じた。金権には弱いという予想を持っていたからであった。瀬長が最下位におちている。戦後ずっと、沖縄人の心を心として戦いつづけて来たのに、瀬長がおち、革新二、自民三になったのでは、沖縄の将来は一体どうなることだろうかと気が気でならなかった。慰霊祭に参列のために、屋良さんが見えた。にこやかだった。喜屋武さんの当選確実の報をえてからかけつけて来られたのであった。ひめゆりの塔を前にして瀬長のことを気にしていると、報道陣から、瀬長当選確実の報をえて喜びあった。しかし全国では自民党圧勝の報である。他の施策はともかく軍備拡大の方向へ進むことは、絶対許されない。今後、単独安定政権を保持して、米国と緊密に結び、軍備拡大へとひたしりにはしるのではあるまいか。ひめゆりの塔を前にして 二百十名の霊にわれわれは、どう答えるべきか。

私は弔辞にこう述べた。

み霊の前に立つと、われわれは心の根が清く洗いきよめられて、深く生命の尊さを感じさせられる。

人間が人間を殺す戦争は、いかなる理由によっても肯定されない。み霊の前に立って、われわれは平和への念願をかたくする。

*1 担架で撤退したのは山城、石川、仲村初子の3人。*2 山城本部壕跡で行われた沖縄陸軍病院関係者による慰霊祭。

※読みやすさを考慮して、旧字体は新字体へ変更し、句読点を適宜補った。明らかな誤字は改め、脱字や送り仮名、その他必要な情報を()で補った。■は判読不能字。



沖縄戦に関する刊行物の多さには驚くべきものがある、といった声がある。実際に、その数を数えたことはないが、確かに、その数は少なくないといっていいだろう。それもこれも、沖縄戦が、異常な戦いであったことによるのだが、その数多い刊行物の中から、この一冊は手に取って欲しいというのがある。本書もその一冊である。

どこから読み出してもいい。それが、この本の特色でもあるが、まずは、自分の住んでいる町や村、或は関心のある島々から読み始めることである。すると、これまで知らなかったことや、或は疑問に思っていたことなどが、鮮明になり、よりいっそう住んでいる村落への愛着が深くなっていくのではないと思う。また、自ずと他の地域についても、無関心ではいられなくなるのではないと思う。様々な戦争があったことを知ることで、視野が沖縄戦全体へ及んでいくはずである。

例えば、次のような「壕」をめぐるできごとである。

その中でもとりわけよく知られている読谷村の事例である。一方の壕では多くの避難民が助かり、一方の壕では多くの避難民が亡くなったというのがそれで、前者では外国に移民の経験者がいたこと、後者には中国戦線の経験者がいたことが、その原因としてあげられている。しかし、そのような事例は、決して読谷だけで起こったことではなかった。北谷町では、一方で、竹槍で抵抗しようとして殺害され、一方で、米国での生活体験のある者がいて助かったというように、同じく北中城村域の瑞慶覧内の壕でも、一方では移民経験のある人がいたことで助かり、一方では壕を出ることなく多くの犠牲者が出たといったことがあったといったことである。

生も死も、それぞれの村落で起こった特異なできごとであると同時にいくつもの村落でも起こっていた。村落ごとの多くの戦争事例集を取り上げていたことで、特異で有りながら、似たようなことが多くの村落で起っていたことが分かるようになっていく。それは「壕」をめぐる事例だけではなく、例えば、波照間島で起こった「離島残置謀略」によって引き起こされた悲劇が、粟国島や伊是名・伊平屋島でも見られたことなど、この一冊は鮮明に浮びあげてくれた。

本書の特色は、また、どの地域についてもおよそ同じかたちで記述されていることであろう。具体的に言うと、「西原町」の記述に見られるように、村落の位置、産物の紹介に始まり、戦闘部隊の移駐、民家への分散、食糧の供出、住民の動員、陣地構築作業、疎開、米軍の侵入、銃撃戦の開始、避難、攻防戦、収容所、帰村といったように、戦争の推移を住民視線で記述し、必要な場合には証言を用いるといったかたちをとっていることである。それだけに、それぞれの村落の様子がよく分かるようになっていた。

全体を通じていえばどの村落でも同じような状況があったと同時に、当然のこととして異なる状況があって、それが鮮明に浮き上がるかたちになっていたといっていだろう。本書によって、ほぼ沖縄全域の戦争の様子を知ることができるが、本書を読了したら、次はそれぞれの市町村が発刊した「戦争編」に当たって欲しい。本書は、各地域で発刊された「戦争編」の概説書といってもいいので、「戦争編」と併せて読むことで、さらに深く沖縄戦を知ることができるはずである。

本書及び各市町村の「戦争編」によって沖縄戦を知ると同時に、あと一步、すすめて「沖縄の外での戦争体験」を知ること必要であろう。同項目の担当者が述べている様に、「残虐行為が日本軍によって各地で行われ、そこに沖縄出身者も関わっており、時には残虐行為の実行者であったことも否定できない」ばかりか、「沖縄戦の記録・記憶からも移民の歴史からも漏れ落ち、歴史の闇に葬られてきた」ことがあるからである。

「歴史の闇に葬られてきた」ことを含め、何故、沖縄戦について、知らなければならないのだろうか。その答えは、本書を読めば自ずと見えて来るだろうが、今、私たちは瀬戸際に立たされているということがある。

2024年9月26日の『沖縄タイムス』を見ると「有事に備え“避難演習” 石垣延べ200人 疎開経験者は不安」の見出しになる記事が出ている。戦前の再来といって過言ではない。避難演習をする前に、やることがあるのではないかという思いを、本書を読んだ人は抱くのではなかろうか。

お知らせ

■栄町共同書店に出店

栄町共同書店（那覇市安里381）に当館も出店しています。同書店は、小さな棚ごとに店主がいるシェア型書店で、当館の棚では、ガイドブックや『アニメひめゆり』（DVD）を販売しています。書店のある栄町市場は、ひめゆりの学校があった場所です。ぜひ学校ゆかりの地の書店に足をお運び下さい。



■2025年3月から多言語音声ガイドの貸出開始（有料）

音声ガイドを聞きながら見学したいという要望に応じて、5言語（日本語、英語、中国語、ハングル、スペイン語）の音声ガイドを制作し、来年3月に貸出を開始することになりました。展示資料や写真のみどころがわかる内容になっていますので、ぜひお試しください。また、音声ガイド機を使えば、第3展示室で上映している「ひめゆりの証言映像」を、4言語（英語・中国語・ハングル・スペイン語）で聞くことができるようになります。

❖「第7回“ひめゆり”を伝える映像コンテスト」募集開始

「第7回“ひめゆり”を伝える映像コンテスト」の作品を募集しています。テーマは「ひめゆりと〇〇（自由選択）」。ひめゆり学徒隊や沖縄戦について、あなたが感じたことや、学んだこと、考えたことを、映像作品で表現してみませんか。プロ、アマ、年齢は問いません。ふるってご応募ください。

くわしくはこちら



締切：2025年1月13日（月・祝）必着

<https://www.himeyuri.or.jp/news/2705/>

訂正とお詫び

前号に誤りがありました。訂正してお詫びいたします。

『資料館だより』73号（2024年5月）p11 【図3】誤「1942年度の一高女2年生」▶ 正「1943年度の一高女3年生」

団体プログラム(平和講話・ビデオ視聴)のご案内

当館では、平和学習プログラムとして、職員による平和講話（約40分）やビデオ視聴（約30分）を提供しています。プログラムは多目的ホールにて、団体貸切で行います。事前予約が必要となりますので、お電話にて空き状況を確認後、FAX・Webフォーム等でお申し込みください。

▶対象：当館を見学する団体 ▶実施時間帯：9:05～16:00（最終開始時間）

● 予約時間に遅れた場合、予約状況によってはキャンセルとなる場合もあります。

● 収容人員は約200人（席）です。

● 多目的ホール使用料 1回：3,300円（同一団体2回目以降は2,200円） くわしくはこちら▶

※多目的ホールは、セレモニーや会議等、上記平和学習プログラム以外での貸出は行っていません。

〈下記の期間はご予約はできません〉

● 年末年始（12月30・31日、1月1日～3日）、旧盆（旧暦7月13日～15日）、慰霊の日前後（6月21・22日、24日）はビデオ視聴のみ予約可能です。

● 慰霊の日（6月23日）は講話・ビデオともに予約できません。



Information

・開館時間 9:00am～5:25pm（入館締切は5:00pm）

・年中無休（台風などで路線バスが運休の場合は休館）

・入館料 [個人] 大人450円 高校生250円 小中学生150円

[団体] 大人400円 高校生200円 小中学生110円

※団体料金は20名様以上、一括払い。 ※団体入館は予約制です。必ず事前にご予約ください。

ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより
第74号 2024（令和6）年11月30日発行

【編集・発行】

公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館
〒901-0344 沖縄県糸満市字伊原671-1 TEL098-997-2100 FAX098-997-2102

ひめゆり平和祈念資料館

検索

<https://www.himeyuri.or.jp/>

